



## 国民的スポーツ (インドネシア編)

### 1. はじめに

インドネシアで最も人気のあるスポーツは何と言ってもバドミントン（インドネシア語で「bulutangkis」）。バドミントンがインドネシアに伝わった時期は定かではありませんが、20世紀の初頭（植民地時代）にヨーロッパから持ち込まれたと考えられています。1951年に設立されたインドネシアバドミントン協会には、2,000人を超す会員が所属しています。

### 2. ルール

日本でも広く知られていると思いますが、バドミントンは、長方形のコートの真ん中に立てられたネットを挟んで2人（ダブルス、ミックスダブルスの場合は4人）のプレイヤーが、ラケットでシャトルを打ち合うスポーツです。“シャトルが相手コートに落ちたらポイントを獲得する”という非常にシンプルなルールのおかげで、老若男女問わず、誰でも楽しめるスポーツとして認知されています。地方に行くと、“ストリートバドミントン”

を楽しむ子どもたちを見かけることもあります（写真1）。住宅街の中にバドミントン用のネットが立っている様子は、日本ではなかなか見かけないのではないのでしょうか？

バドミントンの試合は、3セットマッチが一般的です。各セットは、21ポイント先取。21ポイントを取ったプレイヤーが1セットを取ります。先に2セットを取ったプレイヤーが勝者です。両プレイヤーが20ポイントで並んだ場合、2ポイント差がつくまで、ゲームを続行します。両プレイヤーが29ポイントで並んだ場合、30ポイントを取ったプレイヤーがセットを取ります。

ラケットの製造技術は年々進化しています。近年、耐久性の高い複合軽量材料で作られたラケットが登場しています。ヘッドの形状も楕円形から等尺まで、様々なモデルが出ています。

シャトルは円錐形状を有しており、その中心にコルクベースが埋め込まれています。気軽に楽しむユーザーをターゲットとして、プラスチック製のシャトルも普及しています。



【写真1】 ストリートバドミントンを楽しむ子どもたち



【写真2】 ラケットとシャトル

【表1】各国のオリンピックメダル獲得数（出展：Wikipedia）

順位	国名	金メダル	銀メダル	銅メダル	メダル獲得数
1	中国	16	8	14	38
2	韓国	6	7	5	18
3	<u>インドネシア</u>	<u>6</u>	<u>6</u>	<u>6</u>	<u>18</u>
・	・	・	・	・	・
7	日本	0	1	0	1

### 3. インドネシアで人気の世界大会

1992年のバルセロナオリンピックから、バドミントンはオリンピックの公式競技に採用されました。インドネシアはこれまで18個のメダル（金：6／銀：6／銅：6）を獲得しています（表1）。今年開催されるリオデジャネイロオリンピックでの活躍に国民の期待も高まっています。

オリンピックの他には、トマス杯（男子の国際大会）、ユーバー杯（女子の国際大会）、及び、スデイルマンカップ等が知られていません。世界バドミントン連盟（WBF）によるチャンピオンシップゲームもインドネシアでは高い人気を誇っています。特に、オールイングランド・チャンピオンシップの盛り上がりは最高潮に達しますね（写真3）。

### 4. 結び

インドネシアでは、数十年前からバドミントンが人々に親しまれています。地方の大会やクラブチームなどから、優秀な選手が次々と排出されています。クラブチームは、将来有望な若手選手のための奨学金制度も持っています。インドネシア政府も、ナショナルトレーニングセンターを作り、バドミントンの普及と強化に努めています。官民一体の育成システムにより、バドミントンがインドネシアの国民的スポーツに成長したのです。

この育成システムで育った選手は、トマス杯、ユーバー杯、オールイングランド・チャンピオンシップ、さらにはオリンピックで活躍し、次の世代の目標になっていきます。イ



【写真3】オールイングランド・チャンピオンシップに出場するインドネシア選手

ンドネシアにかぎらず、中国、韓国、マレーシア（メダル獲得数：5）、そして日本も含めたアジア諸国は、バドミントンの強豪国として、これからのしごきを削っていくことでしょう。

#### 著者紹介

Mr. Rohaldy Muluk（ロハルディ・ムルック）

Chapter One IP代表。1954年パダン（西スマトラ州）生まれ。ベルリン工科大学卒業。専門は物理・機械。エンジニアとしてドイツで17年過ごした後、2004年より知的財産分野のキャリアをスタート。2009年コンサルタント試験合格。趣味はスポーツ。  
<http://www.chapterone-ip.com/>

#### 編訳者紹介

木本大介（きもと・だいすけ）

日本弁理士、GIP東京所属。1977年神奈川県生まれ。専門は通信、電気、ソフトウェア。2005年弁理士試験合格。企業知財部3年、特許事務所7年の経験を経て2013年7月より現職。モットーは、「正しいモノより楽しいモノを」。  
<http://www.giplaw-tokyo.co.jp/jp/>